

常住の春

池上義圓

坤軸一轉、去年の人は茲に今年の人となつた。

身も心も年毎に古くこそなれ、新らしくはと思ひながらも、百八の鐘の聲を聞いては人の心地何となく清々しく樂し。深草の政公曾て『春たつ心を』と題して、

こほりぬし野中の清水うちとけて

もとのこゝろにかへる春かな

と詠せられた。これ新春の有様を詠すると共に人の心のゝびやかある状態をも、最と巧妙に優雅に言ひ盡されてあるかと思ふ。張詰めた氷がミシ／＼と朝日に融ける如く、心の結ばれも解けて何となく喜ばしい、唯喜ばしい計りでなく何處にか神聖な處がある、これ新春に感ずる吾等が心の味である。併し此味が人の世に留つてゐるのは僅少の時間で、七草がすみ十五日がすみと何時やら消失して仕舞ふが、若しも斯様を心で一生を送るこ

とが出来たなら、人世は如何に幸福であらう。世の中には之を引留る妙法は無いのであらうかと思ふ時『汝等の願を満足せしむるは唯我れ一人の力なり常に我光明に接して迷妄の水を融け春は長へに汝の心にあるべし』との佛の梵音が朗々として吾が耳に響くのである。さらば吾等は疾く佛陀の大慈悲によりて、寂光常住の春を求めねばなるまい、水が寒氣にとじられて氷となる、本覺の佛も迷ふが故に凡夫となる、水と氷と異なる如く凡夫と佛と違つた様に見へる、之を天台大師は『寒來て水を結び變じて堅氷となすが如し』と説いた。之迷の水を融かす慈悲ある春の日は、經に所謂『慧日大聖尊』の佛陀である。五十年の説教第四十三年の新春に靈山會上鶯の初音高く法々華經の春に逢ひ、迷の水は悟の水とけて『我身は本覺の如來なり』ともとの心に還つたので之を圓融の妙法と名づけた、此妙法を信ずるによりて得たる『我がこの土は安穩にして天人常に充滿せり』との信證こそ實に不斷の春の心と云ふべきである、常住不

變の春なれば、現在未來の隔てなく遍一切處の春
あれば、遠く西方天國に求むるに及ばず、貴賤貧
富の別も無く、常位即妙商は算盤をとり、農は鋤
鍬をとりて常に春の光りに飽く事が出来るのであ
る、法華經には之を説いて『及び余の諸の住處に
あり』と云ふ。

久遠本時の別風光嚴然として個々の眼前に在り
人間の春夏秋冬は悉くみち寂光の春を飾る一色彩
山野河海咸く満目の花からざるはなし、大聖人更
に之をわしへて、

『されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れ
の處にても候へ常寂光の都たるべし我等が弟子檀
那ごならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見
本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふことうれしとも
申す計りなし』等と仰せられた。

宇宙をすべて靈化し、一切を擧げて活動せしむ
る本時寂光の春人はこゝに入りて深大なる意義を
覺り、國は此處に到りて社稷の利福を益し、世は
これに逢ふて真正の平和を得るのである。世の人

々々疾く長夜の眠より覺めて麗らかなるこの寂光
の春色に逍遙せよ!!

心の私語

深山木生

降るはく、どんよりした天氣は、いつか細か
き白塵ごちて落ちて來た。深い霧がかゝつたよう
に向ふは煙つて居る。鹿の子班の様に點々として
新年第一日に降つた雪の名残を止めて居た。遠山
も見えずあつてしまつた。此の雪に驚いてか、名
も知れぬ小鳥は、ピー〜と囀り廻つて居る。い
つも噪々しい朝も、今日はわつとりとして靜かだ
ある。私は、今自分の部屋の窓を開けて、机に寄
りながら、此の珍らしい雪の朝を眺めて居る。何
處からか朝勤の木鐘の音が、いと靜かな空氣を破
つて、何かしら自分の心の奥に潜んで居る何物か
をそゝり立てる様に響いて來る。

古い教場で、大工が、